

八尾市文化財調査報告51
平成16年度国庫補助 高安古墳群等調査事業

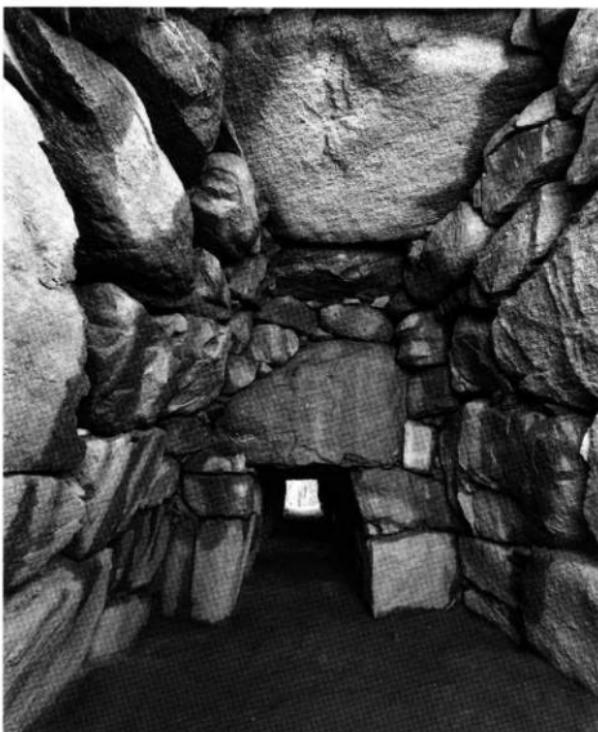
高安古墳群 測量・実測調査報告書
—法藏寺境内 市史跡開山塚古墳—

2005年3月

八尾市教育委員会

『高安古墳群測量・実測調査報告書—法藏寺境内 市史跡高山塚古墳』 八尾市教育委員会 2005年3月 正誤表

頁	行	誤	正
1	第1回	花園山古墳	花園山古墳
1	第1回	芝塚古墳	芝塚古墳
3	第3回	郡川 <u>6</u> 号墳	郡川 <u>16</u> 号墳
6	最終行	郡川 <u>5</u> 号墳・ <u>6</u> 号墳	郡川 <u>2</u> 号墳・ <u>3</u> 号墳
6	最終行	後蓋後半墳	後蓋墳
9	1	郡川5-B号墳	郡川3-B号墳
10	最終行	「 <u>墳</u> 内における	「 <u>墓</u> 内における
11	表2注記	佐藤隆介	佐野隆介
12	23	(17)①佐藤隆介	(17)①佐野隆介



開山塚古墳 前壁から羨道
(阿南辰秀氏撮影)



開山塚古墳 奥壁



開山塚古墳 左側壁

(上下とも阿南辰秀氏撮影)

はじめに

八尾市の東側を画する生駒山麓には、高安古墳群をはじめとする多くの古墳が所在しています。まさに、古墳の宝庫とも呼べる地域であります。そのなかで、高安古墳群は、全国的にも有数の群集墳であり、かつては、500基以上の古墳があったともいわれております。また、明治時代には、大森貝塚の発見で有名な米国人エドワード・S・モースや、英国人ウィリアム・ガウランドが、調査を行った古墳群としても、大変有名であります。

本年度末には、国史跡心合寺山古墳の史跡整備事業が完了し、来年度にはいよいよ開園の運びとなりました。今後は、心合寺山古墳を拠点として、高安古墳群をはじめとする山麓の貴重な文化財である古墳について、広く市民に親しんでいただける場となるよう、保存調査計画を進めていく所存であります。

まず、本年度より継続的に、文化庁国庫補助事業にて、分布調査及び測量・実測調査を開始し、その第1号として、高安古墳群内を代表する古墳の一つである開山塚古墳について、測量・実測調査を行い、その結果、八尾市指定史跡といたしました。本書は、その調査報告をとりまとめたものであります。

最後になりましたが、今回の調査を行うにあたり、深いご理解とご協力をいただきました関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成17年3月
八尾市教育委員会
教育長 森 卓

例　　言

1. 本書は、八尾市教育委員会が、平成 16 年度に国庫補助事業（重要遺跡確認・保存目的）で行った高安古墳群内・開山塚古墳の墳丘測量及び石室実測調査の報告書である。
2. 調査は、八尾市教育委員会文化財課（課長 守口謙）が主体となって行った。
3. 調査にあたっては、開山塚古墳の所有者である法藏寺ご住職、有澤博道氏に多大なご協力をいただきた。ここに記して厚くお礼申し上げます。
4. 調査にあたっては、本市文化財保護審議委員、村川行弘氏、堅田直氏、井藤徹氏、史跡整備委員、和田晴吾氏、大阪府教育委員会、福田英人氏のご指導をいただいた。また、御所市教育委員会の木許守氏には、現地にて有益なご教示をいただいた。記して、厚くお礼申し上げます。
5. 卷頭 1・2 の写真は、阿南亨真工房 阿南辰秀氏の撮影である。
6. 現地調査にあたっては、調査補助員として下記の方々の参加をいただいた。
大西 進 横山妙子 松江信一 西森忠幸 塙内洋平 今西康宏（順不同 敬称略）
石棺材の実測は、調査補助員、今西康宏が、須恵器片の実測及び遺物のトレースは、調査補助員、高橋尚子が行った。また、石室全面のトレースは、文化財課嘱託員、藤田典子が行った。
7. 調査担当及び本書の編集・執筆は、文化財課技師、吉田野乃が行った。
8. 開山塚古墳は、本調査の結果、高い文化財的価値のあるものとして、平成 17 年 3 月に八尾市指定史跡に指定された。

本 文 目 次

1. 開山塚古墳の測量・実測調査	1
2. 法藏寺境内出土の石棺材	9
3. 「河内名所図会」にみられる開山塚古墳等の様子	9
4. 考古学史上の開山塚古墳	10
5. 小結	10

図 版 目 次

卷頭 1	開山塚古墳 前壁から羨道
卷頭 2	開山塚古墳 奥壁・左側壁
図版 1	開山塚古墳 墳丘現況
図版 2	開山塚古墳 調査状況・石棺材等

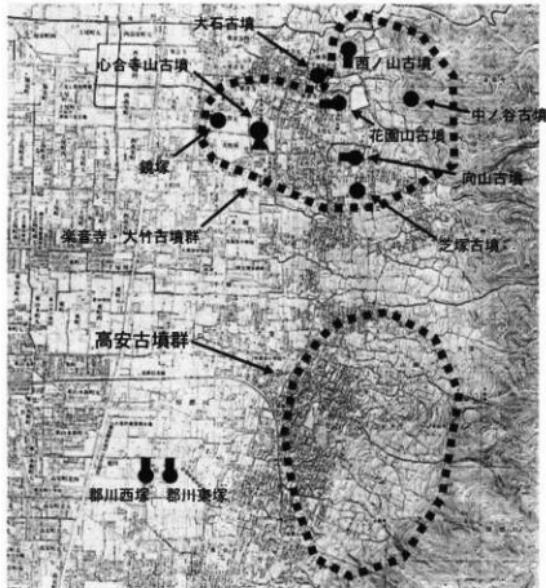
1. 開山塚古墳の測量・実測調査

[調査経緯]

八尾市教育委員会では、高安古墳群をはじめとする山麓の未指定の古墳について、保存活用をはかるため、本年度から文化庁国庫補助事業にて、継続的な調査を行うことになった。高安古墳群については、全国的にも有数の群集墳であり、学史上も著名な古墳群であることから、国指定化を目指した保存計画を策定するため、詳細分布調査を行うこととした。また、これと併行して高安古墳群内や山麓の重要古墳について、保存活用をはかるため、墳丘測量等を行うこととした。

高安古墳群の分布調査については、古くは、1962年(昭和37年)に白石太一郎氏によって行われている。⁽¹⁾その後、大阪府教育委員会、中田遺跡調査会学生有志、「高安城を探る会」による調査が行われた。また、八尾市教育委員会においても、1961年(昭和36年)に、沢井浩三氏による古文化財台帳作成作業の一環としての調査が行われた。また、1992年(平成4年)から1993年(平成5年)には、文化財課で分布調査を行い、台帳の作成を行った。今後、高安古墳群の調査事業を進めるには、各調査主体の古墳番号の対照のできる古墳データー覧表の作成が必要であった。また、古墳番号は、文化財課では、沢井浩三氏の古文化財台帳の古墳番号を基にした番号を用いているが、通し番号であるゆえの煩雑さがあり、新たに地区毎の古墳番号を付する必要があった。また、分布調査自体も未確認古墳の発見を主眼とする網羅的な分布調査は不充分な状態であった。このため、本年度から地区毎の網羅的な分布調査及び、既往の調査成果を含めた古墳データー覧表の作成作業を行うことにした。本年度は、服部川地区について、平成17年の2月から3月に行う予定としており、現在、調査中であるため、来年度に調査報告を行うこととする。

重要古墳の測量調査については、本年度は、高安古墳群を代表する古墳の一つである法藏寺境内の開山塚古墳について、市指定史跡化をはかるため、墳丘の測量(平板測量1/100)と石室実測(1/10)

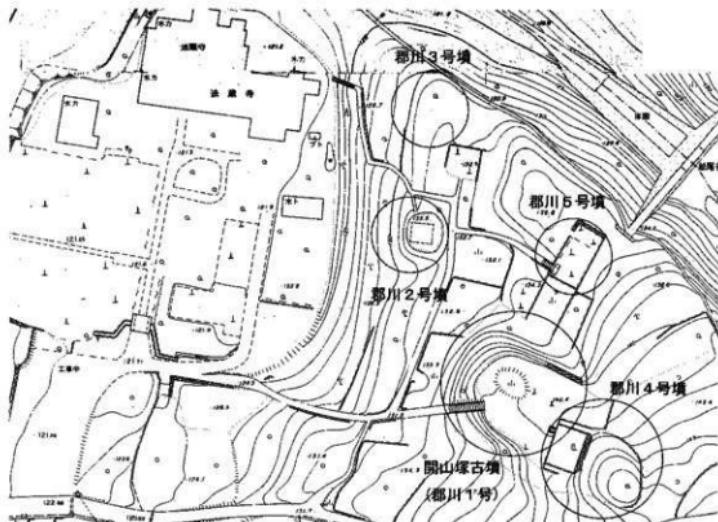


第1図 高安古墳群と周辺の古墳

を行った。調査成果は、本書にて報告するものとする。現地での測量と石室実測調査は、平成16年10月1日から12月29日まで行った。また、石室内の写真撮影は、平成17年2月24日に行い、撮影のための石室内の清掃作業を、2月21日から2月23日に行った。法藏寺本堂前の石棺材の実測は、2月22日に行つた。

【位置と環境】

開山塚古墳は、八尾市郡川6丁目の法藏寺境内に所在する。高安古墳群は、八尾市の生駒西麓全体に分布する群集墳であるが、分布が最も集中するのは、近鉄信貴線の服部川駅の東側の山麓一体、北から、大窪、服部川、郡川の地域であり、開山塚古墳は郡川に所在する。服部川と郡川の地区の間には、松尾谷という谷があり、この谷の南側の北西方向に延びる尾根上に立地する。付近には、開山塚古墳の他に、4基の横穴式石室墳が確認されている。また、現在は開口していないが、後述する「河内名所図会」には描かれていた古墳等があり、本来は、10基近い数の古墳による一支群を形成していたとみられる。このうち、開山塚古墳を除く3基の横穴式石室墳については、昭和58年度（1983年）に保存をはかるための範囲確認の発掘調査が行われた。この報告書では、法藏寺境内の古墳について、法藏寺境内1号墳～4号墳と仮称されているが、今回の報告では、地区ごとの新番号で称することとし、既往の調査の古墳番号との対照表を表1に示しておく。なお、開山塚古墳は、郡川1号墳となるが、固有の名称を有する古墳については、その歴史的意義を重視し、固有の名称で呼称することとする。さて昭和58年度の調査においては、開山塚古墳の西側の3基の古墳が調査された（第2図）。まず、郡川2号墳（法藏寺境内2号）は、石室全長7.5mを測る右片袖式の横穴式石室であり、石棺材や土師器、鉄釘の他に、山辺編年のTK209型式期とみられる須恵器が出土している。また、郡川3号墳（法藏寺境内3号）は、全長9.7mを測る両袖式の横穴式石室であり、田辺編年のTK209型式期とみられる須恵器が出土している。また、郡川3号墳の東南墳丘裾で小型の横穴式石室墳が検出された。調査時には、法藏寺境内3-B号墳と称されているが、これは、郡川3-B号墳と称する。本墳は、全長4.5mを測る無袖式の横穴式石室であり、刀子、鉄釘、土師器の他に、田辺編年のTK217型式期とみられる須恵器が出土している。

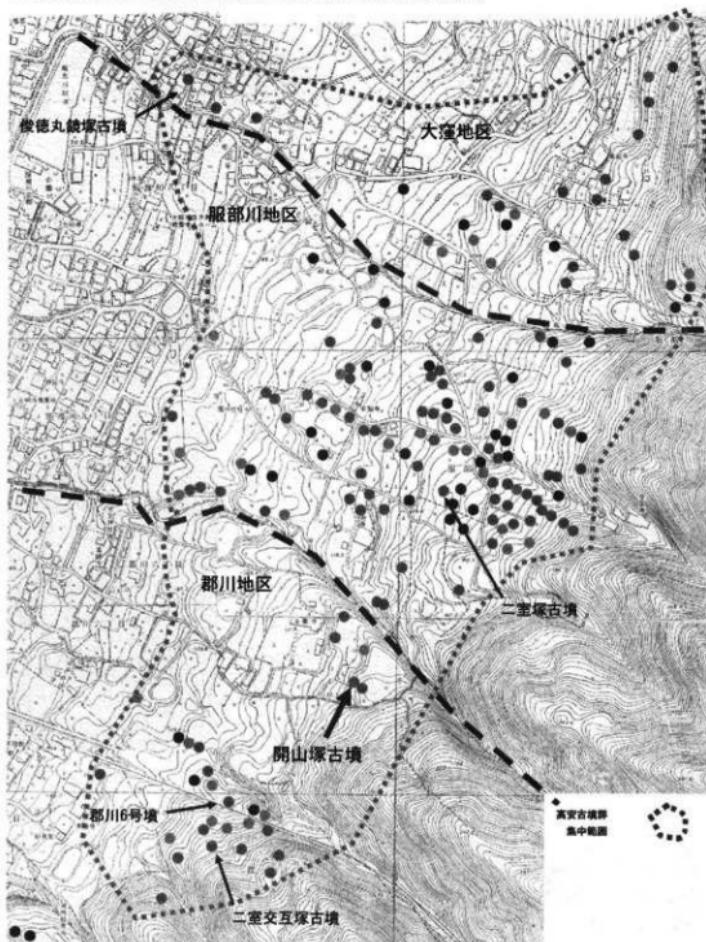


第2図 法藏寺境内の古墳 (1 / 1000)

市教委新番号 (2005~)	昭和58年度調査時 仮番号	八尾市文化財目録 (1994)	高安城を探る会 (1990)	中田道助調査会 (1977)	白石太一郎 (1968)	備考
網山塚古墳 (郡川1号墳)	法藏寺境内1号墳	142号墳	郡3号墳	247号墳	147号墳	
郡川2号墳	法藏寺境内2号墳	141号墳	郡2号墳			
郡川3号墳	法藏寺境内3号墳	140号墳	郡1号墳	246号墳		
郡川3-B号墳	法藏寺境内3-B 号墳					昭和58年度発掘調 査時出土
郡川4号墳	法藏寺境内4号墳	143号墳	郡4号墳	248号墳	146号墳	
郡川5号墳						今回調査新記

表1 法藏寺境内の古墳番号対照表

*八尾市文化財目録(1994)の古墳番号は、沢井浩三氏の古文化財台帳の番号を基にしている。



第3図 高安古墳群 集中地域古墳分布図

開山塚古墳は、これらの古墳の南東側の尾根上に立地にする。石室の全長は、13.05mを測り、高安古墳群中では、最大規模の石室を有する。現在、墳丘上からは、大阪平野はもちろんのこと、晴天の日には、淡路島まで望見することのできる位置にある。また、東側背後には、開山塚古墳と墳丘を接して、郡川4号墳が造られている。

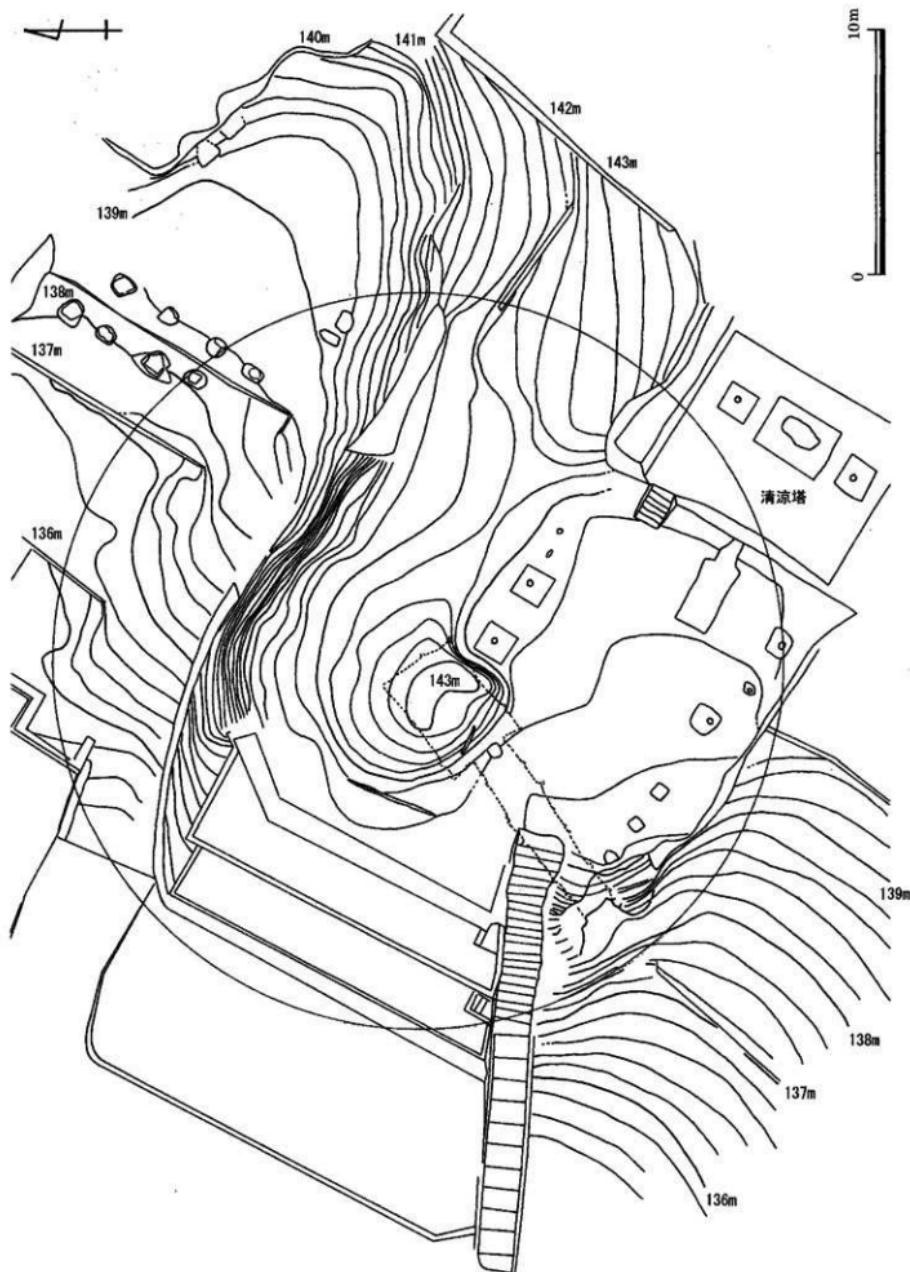
【墳丘測量調査】(第4図)

20cm間隔の等高線で、縮尺1/100の平板測量を行った。まず、墳丘の規模と形状をみていきたい。石室開口部の南西側、標高137.4m付近で等高線が弧を描いており、この付近が墳丘の裾になるとみられる。玄室奥壁の幅を折半する点を墳丘中心点とし、開口部南西側の墳丘裾を結ぶラインを半径とした円を推定すれば、直径30m前後の中墳に復元できる。この墳丘規模は、高安古墳群中では、大きいものになる。墳丘の北側は、削平を受けており石垣が造られているが、石垣のさらに北側に、墳丘裾の名残りである地形がみられる。この地形は、先に推定した墳丘裾推定ラインの円弧上にのる。墳丘の高さは、墳丘裾が標高137.4m付近であり、墳頂部の最大高が、標高143.2m前後であることから、5.8m前後になる。次に墳丘の状態をみていきたい。墳頂部は、法藏寺歴代住職の墓地として整地され、玄室部分が残丘状に遺存している以外は、平坦面となっている。南東側は、郡川4号墳の墳丘と連続しており、開山塚古墳の墳丘の一部を侵食して、郡川4号墳の墳丘が築造されているようにみえるが、両者の古墳の前後関係は、現段階では、判断できない。墳頂部の北側は、先述したように削平を受け、崖面に石垣が造られている。石垣は、現代のものではあるが、「河内屋」と刻まれた灯籠の台石かとみられる石材が一箇所に転用されていた。墳丘北西側は、近年、墓地として造成されている。墳丘南側の開口部より東側は、削平を受け、崖面に石垣が造られている。墳丘は全体に近世以降の削平がみられるが、石室開口部付近は、良好に遺存している。

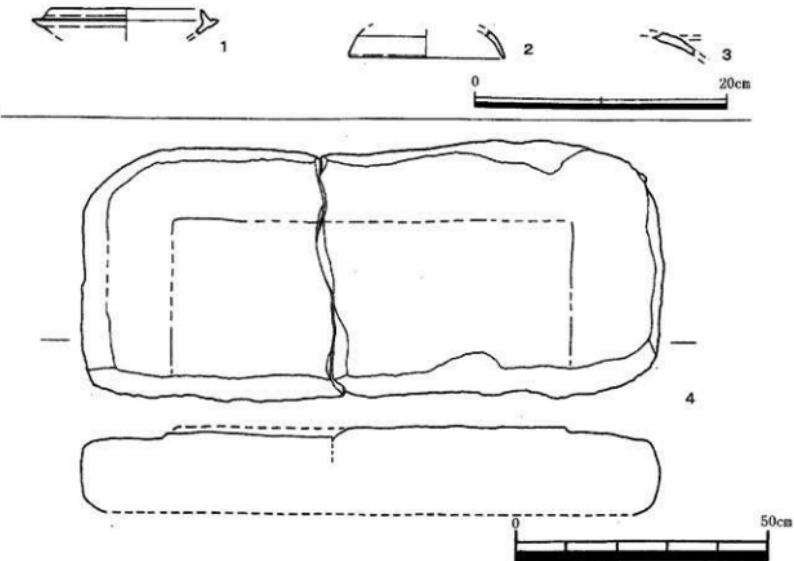
開山塚古墳の立地する旧地形は、比較的緩やかな尾根地形であったとみられるが、墳丘の北側から西側を中心に旧地形の切土・盛土を行い、平野側である墳丘西側から見て、壮大な墳丘に見えるよう造られているようである。

【石室実測調査】(第6図)

石室については、1/10で実測調査を行った。両袖式の横穴式石室であり、開口方向は、南西方向(W-36°-S)である。石室の大きさは、全長13.05m、玄室長4.67m、玄室幅3.37m、玄室高(現状)3.77m、羨道長8.38m、羨道幅1.5m、羨道高(現状)1.6mを測る。墳丘裾の高さが、標高137.4m付近と考えられることや、羨道付近の石室下面の傾斜のありかたから、石室内には0.3m~0.4m前後の流入土が堆積しているとみられる。このことから、本来の玄室の高さは、4.2m前後、羨道の高さは1.9m前後と推定される。袖石の幅は、右袖が1.02m、左袖が0.8mであり、玄門幅は、1.5mを測る。また、羨門部は、本来、右側壁側にさらに1石あったとみられるが、現況では、幅1.4m前後を測る。石室の大きさは、高安古墳群では最大の大きさとなる。石室の平面プランは、玄室長に対する玄室幅の割合が比較的高い(玄室幅指数0.72)。石材は、付近の谷川より運ばれたとみられる花崗岩が上体である。径2mまでの石材が主に使用されているが、玄室天井石には、径3m以上の巨石が使用されている。玄室の石組みは、石材を基本的に5段に積んでいる。基底部付近は、大きな石材を使用し、天井石に近い部分では、比較的小さな石材を使用して、天井石までの高さを調整している。また、大きな石材の間には、径10cm前後までの極小の石を多く挟み込んで、細かな調節を行っている。前壁は、径2.5m前後の人大きな見上石を設置し、天井石との間に1段積む。特徴的であるのは、見上げ石と接する側壁側の石材が、前壁側に跨ぐように、斜めに設置されていることであり、右側壁側で特に顕著であった。これについては、見上げ石の幅が当初の見込みより狭かったために、側壁側の石材をせり出させたのか、別の理由によるのかは、判然としなかった。袖石は、奥壁から見て右側は、径1.0m前後の立石の上に1石を積み、奥壁から見て左側は、立石の上に2石を積む。羨道は、基本的に2~3段積みであり、天井石と接する部分には、小さな石材を使用して、天井石までの高さを調整する。天井石は、玄室部分は、3石よりなり、羨道部分は、見上げ石を含めて4石よりなる。石室の保存状態は、一部に石材



第4図 開山塚古墳 墳丘測量図 (1/200)



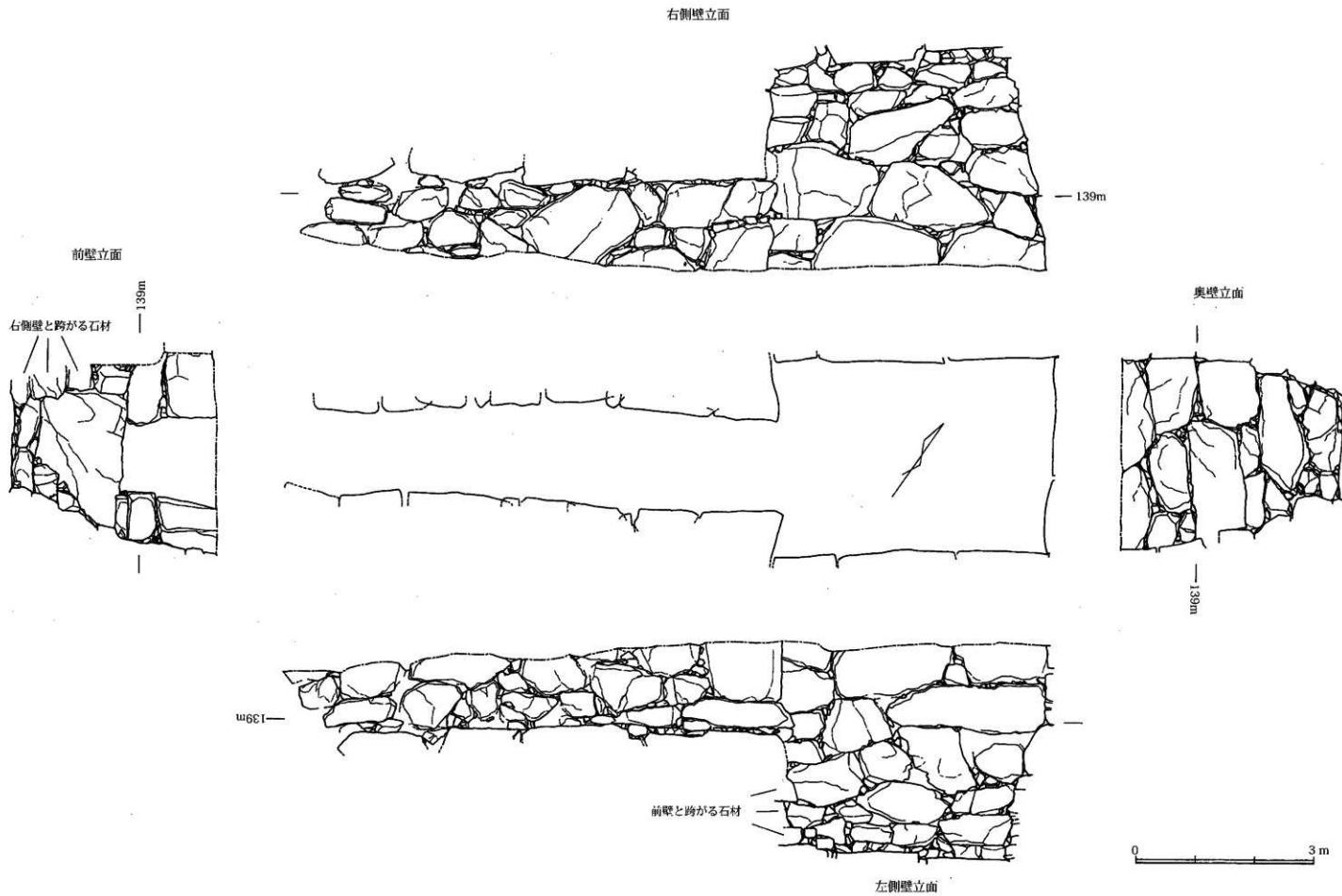
第5図 遺物実測図（須恵器片1/4、本堂前石棺材片1/10）

の崩落が見られる。また、羨道部右側壁の開口部側に近い部分が、土圧により内傾している。しかしながら、高安古墳群の石室の中では、これだけの石室規模を有しながらも、良好な保存状態を保っているとみてよいであろう。

なお、調査及び写真撮影のための消掃中に、須恵器の壊片4点と石棺材片を採集した。石棺材片は、組み合わせ式石棺の棺材とみられるものであり「上山系の凝灰岩（写真5の1）と、加西市産の高室右かとみられる凝灰岩の（写真5の2・3）二種の石材がある。（図版2写真5）。本報告では、実測作業が間に合わなかったため、実測図は次年度報告としたい。

【築造時期について】

採集した須恵器壊片4点のうち、実測した3点（第5図1～3）について、みてみたい。1は、玄室玄門付近で採集した壊身片である。色調は淡灰白色を呈し、焼成は軟質である。口径は12cm、残存高は2.15cmを計る。2は、羨道玄門付近で採集した壊蓋片である。色調は、暗灰色を呈し、焼成は硬質である。口径は12.3cm、残存高は2.35mを計る。3は、玄室中央付近で採集した壊蓋片である。色調は、暗灰色を呈し、焼成は硬質である。他に、実測は行っていないが、玄室玄門付近で採集した壊蓋片かとみられる小片がある。これらは、田辺編年のTK209型式期とみられるものである。また、開山塚古墳の西側にある郡川2号墳・3号墳は、前述したように、田辺編年のTK209型式とみられる須恵器が出土している。開山塚古墳は、白石太一郎氏の1966年の論文では、石室の平面形態等から、氏のII型式に位置づけられ、6世紀前半頃とされている⁽¹⁹⁾。また、近年の研究では、太田宏明氏が、畿内の大型横穴式石室を石室の属性（部位）によって分類されたのちに、須恵器の型式等で裏づけされた編年案を提示されている⁽²⁰⁾。開山塚古墳は、郡川2号墳・3号墳とともに、氏の分類の「5群」に位置づけられている。開山塚古墳、郡川2号墳・3号墳の石組みの方法、出土須恵器の型式は、氏の畿内の大型横穴式石室の編年上、矛盾なく位置づけられており、妥当なものと考えられる。築造時期については、開山塚古墳は発掘調査が行われておらず、出土須恵器が表面採集資料のみという限界があるが、現段階で判断すれば、開山塚古墳、郡川5号墳・6号墳の築造時期は、6世紀中葉から後葉後半頃と考えられる。郡川5号



第6図 開山塚古墳石室実測図 (1 / 60)

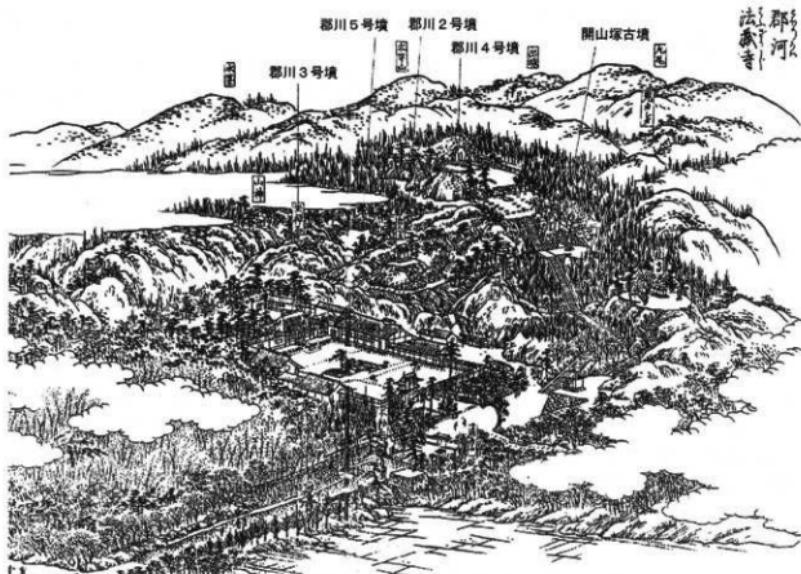
墳に付随する郡川5-B号墳は、田辺編年のTK217型式期の須恵器を伴う、小型の無袖式の石室であり、7世紀前半に下るものとみられる。本墳は、昭和58年度の調査報告において指摘されているように、郡川3号墳ときわめて親縁な関係にある被葬者の墓とみられる。

2. 法藏寺境内出土の石棺材（第5図4）

法藏寺の本堂前の軒下には、法藏寺境内の古墳から出土したとみられる石棺材が保管されており、今回の調査において、実測を行った。本資料については、奥田尚氏が既に紹介されており、岩石種は、流紋岩質凝灰角礫石とされている。二上山系の石材とみられる。本資料は、組み合せ式石棺の底石の端部かとみられる石棺材である。最大幅1.15m、最大長0.55m、最大厚0.18mを測る。小口石、側石をはめるための溝が三辺にみられ、遺存部で幅13cm、深さ2cmを測る。また、一部にごく僅かに赤色顔料の遺存かとみられる部分があった。本資料の石材は、開山塚古墳の石室内で採集した二上山系の石棺材に類似するが、開山塚古墳のものであるかは、現段階では判然としない。

3. 「河内名所図会」にみられる開山塚古墳等の様子（第7図）

江戸時代の享和元年（1801年）に描かれた河内名所図会には、法藏寺境内の様子が描かれているが、この中には、開山塚古墳をはじめとする法藏寺境内の古墳も描かれており、注目される。開山塚古墳については、石室開口部の石組みの様子が、石垣状に描かれている。また、開口部の前面に台石状の石が描かれているが、現在は確認することができない。また、墳頂部の清涼塔に伴う祭壇状の石や、墓石の台石なども描かれている。開山塚古墳の墳頂部には、現在、郡川4号墳側にある清涼塔を中心に、法藏寺歴代の住職の墓石が並ぶ。法藏寺の草創は、元禄年間に黄檗宗の僧が住し、極楽寺と号していたが、寛延元年（1748年）に好山和尚が来往し、自ら開山となり曹洞宗法藏寺と改めたとされる。清涼塔は、好山和尚の廟塔といわれている。また、墳頂部の玄室直上付近の残丘状部分の裾には、「当山開基墓」と刻まれた墓石があり、享保五年（1720年）、正徳四年（1714年）の没年のある夫妻の墓碑である。夫



第7図 「河内名所図会」に見られる法藏寺境内の古墳

である享保五年の人物は、「上州上郷善三郎泰正親」とある。これは、法藏寺以前の寺名である極楽寺の僧の墓石ではないかと考えられている。法藏寺の開山である好山和尚の没年が宝曆11年（1761年）である。河内名所図会が描かれたのは享和元年（1801年）であることから、18世紀末には、開山塚古墳の墳頂部が整地され、現在の状況になったものとみられる。

法藏寺境内の他の古墳の様子としては、郡川4号墳が清涼塔の背後に、丘状に描かれている。また、郡川3号墳は、「座禅石」と書かれ、丘状に描かれている。郡川2号墳は、「くわんのん」（觀音）と書かれ、社の建つ丘状に描かれている。郡川2号墳の墳頂部には、現在も水仏が祭られている。さらに、注日されるのは、開山塚古墳と郡川3号墳の間に、石室の開口部とみられる石組みが、石垣状に描かれている部分がある⁽⁹⁾。現地を確認したところ、この部分は、墓地となっているが、尾根を利用した古墳状隆起を呈しており、南西側には石の露出もみられた。のことから、現在は未開口ではあるが、横穴式石室が存在することはほぼ確実とみられ、今回、郡川5号墳の番号を付することとした。

4. 考古学史上の開山塚古墳

開山塚古墳は、日本の近代的考古学の最初の実践者であり、大森貝塚の発見で知られるエドワード・S・モースが、明治12年（1879年）に調査を行った古墳であることが、指摘されている。今回の実測結果も、モースの論文「日本におけるドルメン」⁽¹⁰⁾に、掲載された石室の計測値とほぼ一致している。また、本論文の石室左側壁の右組みのスケッチは、今回の実測図と一致している（第8図）。モースは、本論文において高安古墳群の9基の古墳の計測値を提示しているが、開山塚古墳については最も詳細な図面を提示して記述を行っており、日本の「ドルメン」の代表例として、開山塚古墳を取り上げたものとみてよいと思われる。モースの調査が、その後の研究に与えた影響は大きいが、高安古墳群においては、英国人ウィリアム・ガウランドが、高安古墳群を中心とした河内の古墳調査、写真撮影を行う契機となったのではないかとも考えられている。また、坪井正五郎の「ドルメン」を古墳と位置づける研究がなされ、その後の古墳研究に重要な役割を果たした。このような意味で開山塚古墳は、考古学の学史上も重要な意義をもつ古墳である

5. 小結

今回の調査によって、開山塚古墳が径30mの円墳であり、全長13.05mを測る両袖式の横穴式石室墳であることが、明らかになった。開山塚古墳は、高安古墳群中、最大規模の石室を有する古墳である。高安古墳群中でこれに次ぐ規模の石室を有する古墳としては、服部川地区的服部川2号墳（文化財譜新番号、旧八尾市文化財台帳109号、高安城を探る会服63号）がある。開山塚古墳は、高安古墳群を造営した集団のなかでも、最も有力な階層の古墳と考えられる。高安古墳群は、畿内の大型群集墳として、畿内政権と周辺氏族との関係をはじめとする古代史の問題を考えるうえで、きわめて重要な古墳群である。この高安古墳群の中にあって、最大規模の石室を有する開山塚古墳のもつ考古学的意義は大きい。さらには、日本における近代考古学の最初の実践者であるエドワード・S・モースが、明治時代に「ドルメン」として調査を行い、その後の日本の古墳研究に大きな影響を与えた古墳として、学史上も重要な意義をもつ古墳である。開山塚古墳は、高安古墳群を代表する古墳の一つといえよう。八尾市の指定史跡として、保存活用をはかっていきたい。

末筆となりましたが、今回の調査においては、高安城を探る会の坂上弘子氏に便宜をはかっていただき、同会の松江信一氏、大西進氏に調査に参加していただいた。松江信一氏には、氏が長年取り組んでこられた高安古墳群の学史研究をはじめとして多くのご教示をいただいた。また、大西進氏には、開山塚古墳周辺の石造物について、多くのご教示をいただいた。また、本調査以前に、開山塚古墳の略測調査を個人で行われ、高安古墳群をはじめとする古墳の研究をなされてきた考古文化研究会の西森忠幸氏にも調査に参加していただき、多くのご教示をいただいた。今回の調査で多くの知見を得ることができたのは、調査に参加いただいた方々の多大なご助力によるものである。ここに記して厚くお礼申し上げます。

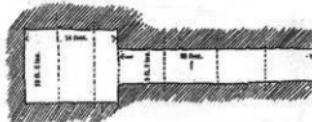
(1)白石太一郎1966『畿内における後期大型群集墳に関する一試考』『古代学研究』第42.43合併号

	玄室長	玄室幅	玄室高	羨道長	羨道幅	羨道高
E・S・モースの計測値	4.27	3.2	3.51	8.53	1.3	1.6
今回の実測値	4.67	3.37	3.77	8.38	1.5	1.6

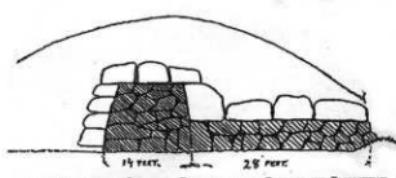
表2 E・S・モースの計測値と今回調査の実測値の比較 (単位: m)

注記 E・S・モースの計測値は、佐藤隆弥・田中一廣訳・校註 1991 エドワード・S・モース「日本におけるドルメン」『花園史学』第12号による。

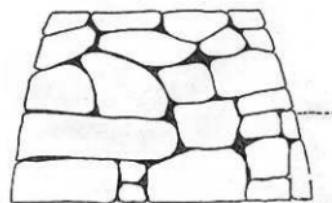
エドワード・S・モース1880『日本におけるドルメン』掲載図



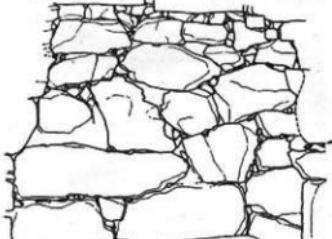
平面図



左側壁図面



左側壁 詳細図



左側壁 実測図

今回の実測図

第8図 E・S・モースによる図と今回実測図の比較

- (2) 大阪府教育委員会1966『大阪府文化財調査概要1965.66年度』・
- (3) 仏教大學考古學研究会1977『陵』3、4合併号
- (4) 高安城を探る会1990『高安古墳群の分布調査』
- (5) 高安古墳群の分布図番号の対照については、高安城を探る会の松江信一氏によって対照表の作成が行われている。松江信一編1997「高安古墳群分布図番号対照表」高安城を探る会
- (6) 大阪府教育委員会1966年「八尾市高安古墳群の調査—昭和41年度第1次郡川地区其他調査概要—」によると、法藏寺境内には、消滅したものを合わせて9基の古墳が存在するとされている。
- (7) 米田敏幸1984「高安古墳群発掘調査概要報告書」『八尾市内遺跡昭和58年度発掘調査報告書』八尾市教育委員会
- (8) 高安城を探る会の大西進氏、坂上弘子氏のご教示による。
- (9) 奥田尚1984「石材の岩石種について」(前掲註7)によると、郡川2・3号墳の石材は、花崗岩、閃綠岩が主とされ、付近の谷川で採取したものと推定されている。開山塚古墳の石材もまた、筆者が実見するかぎりでは、同様の石材が使用されていると思われる。
- (10) 前掲註(1)
- (11) 田代宏明 2003「畿内型石室の変遷と伝播」『日本考古学第15号』日本考古学協会
田代宏明1997「畿内型石室の属性分析—大和盆地の資料を中心として—」『千里山文学論集』第58号
- (12) 前掲註(7)
- (13) 奥田尚1984「石材の岩石種について」(前掲註7)
- (14) 名所団会に描かれた開山塚古墳をはじめとする法藏寺境内の古墳のありかたについては、西森忠幸2002「河内における後期古墳を考えるV—河内開山塚古墳について—」『考古文化』第24号 考古文化研究会において、検討がなされている。
- (15) 坂上弘子2002『八尾の学舎合 石川家資料』
- (16) 調査に参加された高安城を探る会の松江信一氏のご教示による。
- (17) ①佐藤隆介・田中一廣記・校註 1991 エドワード・S・モース「日本におけるドルメン」『花園史学』第12号
②松江信一2002「高安の「ドルメン」—高安古墳群研究史ー」『郵政考古紀要』第31号
- (18) E・S・Morse 1888「Dolmens in Japan」『THE POPULAR SCIENCE MONTHLY』Vol. XVI
- (19) 前掲註17の①文献の田中一廣氏の「あとがき」による。
- (20) 幸井正五郎1888「古墳、塚穴、ドルメン同源説」『理学協会雑誌』第6号 他

報告書抄録

ふりがな	たかやすこふんぐんそくりょう・じっそくちょうさほうこうしょへうぞうじけいだいししきかひさんづかこふん一					
書名	高安古墳群調査・実測調査報告書—法藏寺境内高安古墳群					
著者名						
巻次						
シリーズ名	八尾市文化財調査報告					
シリーズ番号	61					
図書書名	青田野乃					
発行機関	八尾市教育委員会					
所在地	〒581-0003 大阪府八尾市本町1丁目1番1号 TEL 0729-91-3881					
発行年月日	西暦2005年3月31日					
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°°'	°°'	(m ²)
しおんじやまこなん						
開山塚古墳	八尾市 郡川	27212	94 37 02	135 39 15	041001~050224	700 保有目的
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	等記事項
高安古墳群・高安古墳	古墳	古墳時代	両袖式横穴式石室		須恵器・石棺材	開山塚古墳が直径30mの円墳であり、高安古墳群中で最大規模の横穴式石室であることを確認。



写真 1 墳丘西より



写真 2 墳頂部 玄室部分



写真 3 石室 開口部

図版2 開山塚古墳
調査状況・石棺材等



写真4 調査状況



写真5 開山塚古墳 出土石棺材

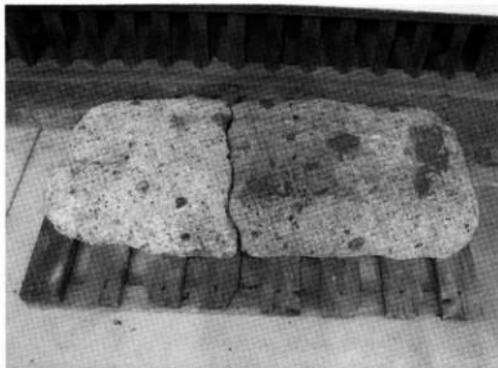


写真6 法藏寺本堂前の石棺材

八尾市文化財報告 51 平成 16 年度国庫補助 高安古墳群等調査事業

高安古墳群 測量・調査報告書－法藏寺境内 市史跡開山塚古墳

発行年 2005年3月

発 行 八尾市教育委員会

八尾市本町1丁目1番1号

編 集 生涯学習部 文化財課

印 刷 (株) ぶりんと工房ヒロノ

[八尾市刊行物番号 H16-136]
